

『浦西和彦 著述と書誌』全四巻について

伊藤 純

はじめに

浦西和彦先生が亡くなられて、はや二年近い時が過ぎた。

浦西先生を知ったのは、ちょうど二〇世紀の終末近い一九九九年五月、貴司山治日記の存在について問い合わせを頂き、関西大学をお訪ねして、その所蔵状況をご説明した時である。その後、東京の私の自宅にお出でになり、その日記の現物を実見された。確か三日間ほど通ってこられ、リビングの一隅で終日読みふけておられたのを記憶する。

しかし、貴司の日記は一九一〇年代から死没直前の一九七一年に至る厩大なもので、とても数日で読み切れるような代物ではない。結局、プロレタリア文学運動の時代を中心に何冊かをお貸しして、それは後日書き起こされ、関西大学国文学会紀要に活字となって掲載された。¹⁾

そのようなことを機縁として、その後、貴司が戦前編集刊行

した雑誌『文学案内』の復刻刊行にもアドバイスを頂き、また、特に記憶に新たなのは、私が戦前の小林多喜二全集刊行への貴司山治の関わりを探索しているとき、その決め手となるような小文が掲載された資料をご恵贈くださったことである。

それは、戦後最初の新日本文学会編『小林多喜二全集』全九巻（一九四八年―一九四九年）²⁾——いわゆる「新日本文学会版」に挟み込まれていた『月報』である。全集そのものはともかく、それに挟み込まれていた『月報』は滅多に出会うことが出来ない。ところがそのことを聞き及ばれた浦西先生が、たまたま（？）もっておられた月報の現物を送ってくださった。なにげないハトロン³⁾の封筒でそれが届いた時は、本当に驚いたものである。

一、『浦西和彦 著述と書誌』全四巻の概要

『浦西和彦 著述と書誌』全四巻は、浦西和彦の主要な著作

と研究を集大成した著作集と言えるもので、二〇〇八年一〇月〜二〇〇九年二月の間に大阪の和泉書院から刊行された。A5判クロス装箱入り、一卷毎に青、黄、赤、緑と、異なる色のクロスで装本されている。

その内容は――

第一巻『新・日本プロレタリア文学の研究』 二〇〇九年一月
三〇日刊

第二巻『現代文学研究の基底』 二〇〇九年二月

二〇日刊

第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』 二〇〇八年一〇

月二〇日刊

第四巻『増補 日本プロレタリア文学書目』 二〇〇九年一月

二〇日刊

となつているが、巻序と刊行の順序は一致しない。実際の刊行順序は、第三巻・第四巻・第一巻・第二巻である。

最初に刊行された第三巻は、本誌（占領開拓期文化研究会『フェンスレス』第五号）掲載の秦重雄「浦西和彦先生インタビュー」でも語られているように、学生時代に浦西がたまたま読んでその良さに驚き、さらにまた大学卒業後たまたま赴任した坂下女子高校（現・岐阜県中津川市・鼎立坂下高校）の近くにかつて住んでいたという二重の偶然に彩られた「葉山嘉樹」の年譜・伝記が収載されている。

二番目の刊行が、プロレタリア文学研究者の座右の書として

膾炙する『増補日本プロレタリア文学書目』である。

そして、この書誌学的なものの後に、漸く「議論」のモチーフが配される。『新・日本プロレタリア文学の研究』『現代文学研究の基底』の二冊である。もちろんここでもその方法論は書誌学的、実証主義的だが、そういう方法によりながら、論旨はきわめて告発的――喧嘩腰といつてもいいような激しいものがある。

埋もれるべきでないものを埋もれたままにしてしまっている人々の怠惰への怒り、埋もれている良きものへ寄り添おうとする愛と焦り……そして浦西は、その告発の手段として超実証的としかしいようながない、書誌的トリビアリズムを展開するのである。

二、「年譜 葉山嘉樹伝」の“超”書誌学

第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』はA5判8ポイント組五〇〇頁を費やした大著である。

しかし、だいたいこの著作の表題自体が奇妙だ。普通、年譜と言えば年表的なものを想像させる。他方で「伝」というと、その主人公の人となりや身辺の出来事を物語る物語的記述を想像する。この二つのタイトルが共存する世界とはどういうものなのだろう。

まず、この『年譜 葉山嘉樹伝』の目次を開くと「一八九四

年（明治二十七年）甲午 数え一歳」に始まって「一九四五年（昭和二十年）乙酉 数え五十二歳」の没年まで、一年刻みの年次が何の説明もなく並んでいる。

そこで試みに冒頭の出生日の記載（『浦西和彦 著述と書誌』〔以下『著作集』と略記〕第三巻、三頁）をみると「三月十二日（月）福岡県京都郡豊津村（現在、みやこ町）大字豊津六百九十五番地に生まれ」に始まって、祖父母、異父、異腹の縁戚に至る係累、維新期の一家の動向、先行研究の矛盾の指摘など、この一日だけで記述は一九頁におよぶ。

また、一九二五年二月三十一日、「淫売婦」が評判となり、文芸戦線同人の忘年会に呼ばれていき、気炎をあげるインテリ・プロ文の連中に反感を感じた葉山が、山田清三郎と乱闘を演じ、あげく山田を投げ飛ばした瞬間に炭鋏夫仕込みの和解のセレモニーを演じて見事に座を納める姿を、山田自身の「プロレタリア文学風土記」からの引用で紹介している（『著作集』第三巻、一一三頁）。

さらに、客死というにはあまりにも悲惨な葉山の死の間も、長女財部百枝の記述を長く引用することによって十分に語らせている。一九四五年一月十八日（木）の項（『著作集』第三巻、四九〇頁）では財部百枝の一文をこのように引く。

駅に停車すると、満人が籠の中に食物を入れて売りに来る。マントウ、ゆで卵、鶏の丸焼きなど、だんだん残り少

なくなるお金に心配する。「百枝、あれ買おうよ」と父は鶏の丸焼きを指す。「まだ先が長いのよ。我慢しましょう」とマントウか、ゆで卵で我慢する。こんな日がいく日か続いた。

……とうとうとして、ひんやりした感じで、目を覚ます。汽車は停車しており、駅のかたわらのどろ柳の太木に数知れぬカラスが黒々と群がり、ガアガアとやかましく、鳴いていた。「お父さん、お父さん」と呼んでも返事がない。もう一度「お父さん、お父さん」と呼びながら肩にさわったら、もう冷たくなっていた。

暖かい身体から離れないシラミが、もう父の死を知らせるかのように、はい出していった。

（財部百枝「父・葉山嘉樹のこと」、『プロレタリア文学研究』芳賀書店、一九六六年一月二〇日）

そして、この『年譜 葉山嘉樹伝』は、主人公の死を報じる朝日新聞の記事の引用で終わっている。

『朝日新聞』東京版一九四六年六月四日付けは、「葉山嘉樹氏（作家）は昨年春長野県西筑摩郡の満州第一木曾郷に入植してゐたが、終戦と同時に現地を脱出、帰国の途中昨年十月十八日、ハルビン東方徳恵で病没した旨、三日朝長野県西筑摩郡山口村の自宅に帰つた長女桃子さんから伝えられた。享年五十三」と訃報を、その死去から八ヶ月後に報じた（『著作集』第三巻、

このように、葉山嘉樹という一人の作家の生涯を、浦西は、戸籍謄本や新聞記事などの同時代資料、あるいは信頼できると判断された書き手の述懐、記述、など、第三者の言質を引用することによって、正に『引用の集大成』として描き出したのである。その死亡の記述さえ、自らの言葉で言うことをさげ、誤記を指摘しながらも新聞社の死亡告知によって語らしめた。

自らの意見や『気持ち』でダイレクトにものを言うのではなく、徹底して『資料』『第三者の言質』を綾なすことによって、そこから醸し出される「意味」の世界を読者自身に感じ取らせるという独特の歴史と文学の認識方法——「浦西学」を『年譜 葉山嘉樹伝』は提示したといえるであろう。

三、『新・日本プロレタリア文学の研究』について

それに対して、第一巻『新・日本プロレタリア文学の研究』と第二巻『現代文学研究の基底』は、議論の書である。この第一巻には「新・く」という文字が添えられているように、約二五年前『日本プロレタリア文学の研究』（桜楓社、一九八五年五月二五日）が編まれており「新・く」はこの旧版の増補改訂版と言うことになる。

まずここでは、目次を一瞥しただけで、浦西がどんな思いでプロレタリア文学の作家に対峙したかがわかる。取り上げられ

ている作家を列挙すると——

前田河広一郎、江口渙、黒島伝治、岩藤雪夫、徳永直、山本勝治、伊藤永之介、里村欣三、本庄睦男、宮本百合子（旧版）、大田洋子、藤森成吉、越中谷利一

が挙げられており、文戦派の人々が大部分である。プロレタリア文学運動の中で戦旗派（ナツプ派）と文戦派（労農派）が対立した流れとして存在し、戦旗派がメジャーな存在だったことは周知のことだが、浦西はあえてマイナーだった文戦派の人々に眼差しを向ける。そこで、文戦派の代表的作家と言える岩藤雪夫についての浦西のコメントを見ると、

岩藤雪夫といえば、戦前のプロレタリア文学運動において、一時期ナツプ派の小林多喜二と並び称せられたこともあった文戦派の代表的作家の一人である。……しかし、この岩藤雪夫を総体的に論じた評論や研究論文は管見に入ったかぎりまだ一篇もない。

（『著作集』第一巻、四五頁）

と述べ、「岩藤雪夫はプロレタリア文学研究のなかでもうすこし注目されてもよい作家ではないか」（『著作集』第一巻、四六頁、五七頁）と、同じ論文の中で二度までも嘆き、二五頁にわたつ

て岩藤の作品を、題材の検討まで含めて詳細に論じている。
加えて――

戦後のプロレタリア文学研究は、ナツ派の作家たちを中心に進められ、どうしても文戦派の作家たちを本格的な研究対象として取り上げることが極めて少なかった。

『著作集』第一巻、一一一頁

として、「経歴未詳の作家たち」という一項がもうけられ、何人かの書き手の名が挙げられるが、その中で、一九二九年、鉄道自殺を遂げた山本勝治という人物の記述を紹介しよう。山本勝治は「十姉妹」(『文芸戦線』第五巻第五号、一九二八年五月一日)で注目されたが、その作風から農民作家に類別され、多くの論評がそれを踏襲するばかりで「経歴未詳」の世界を脱することが出来なかつた。浦西は、例のごとく徹底した「身元調べ」と浩瀚な書誌的追求によってこの作品の原題が「暁暉」(夕映えの意)であることを突き止め作者のモチーフを解明し、さらには彼が農民ではなく商家の子弟であることを確認。農民子弟の農村体験による「農民小説」というパターナルな、私小説的発想に異をとねえる。

このように、浦西の姿勢は一貫して埋もれた人、誤解されている人、の無念を晴らすというような、「弱者」への熱い視線が特徴である。

従ってその反面の「埋もれたまま放置する」「誤り・誤解を放置する」という怠慢に対しては焦慮と怒りを隠さない。その典型は同じこの第一巻に収載されている「宮本百合子全集(河出書房版)逸文について」で見ることが出来る。これは、この版の宮本百合子全集の、編纂の杜撰と怠慢に対する二九頁に及ぶ怒りに満ちた告発である。紙数の関係でこれ以上触れないが一読に値する一文であろう。但し『旧版』のあとがきで「新日本出版社版『宮本百合子全集』……が完結した今日において、その(告発の)使命はすでに果たしたものと考える。」と書かれているが、それでもなおかつそれが『著作集』に採録されているというのは「歴史的文書」として諸家への戒め、という意味が込められているものと思う。

おわりに

浦西先生のご自宅に伺うことになったのは先生が関西大学を定年退職され、その膨大な資料コレクションは県立あきた文学資料館に寄贈された、と聞いた後のことだった。噂の続報で、寄贈されたのは活字系の刊本や雑誌で、生資料はまだお手元にあると聞いたのである。二〇一三年春、占領開拓期文化研究会の二、三の方と、法隆寺に近い浦西先生の自宅に押しかけた。

先生は座敷一杯に、生資料のファイルをひろげて見せてくださると同時に、どこか適当な場所に持ち出して複写しても良い、

といつて下さった。しばらく後に我々は再度車で伺い、生資料綴りを立命館大学の研究室に運びスキナーによって画像データ化した。さらにデータベースとしての充実を図るために「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」が組織され、小樽文学館池田寿夫旧蔵資料、大原社研資料、札幌大学松本克平旧蔵資料も加え、二〇一七年丸善雄松堂からDVDデータベース、昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会編『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』として刊行することができた。

その間、何度も浦西先生のお宅に伺うことになったが、そのたびに（日中にも拘わらず！）ワインやお寿司や、とさまざまなおもてなしにも預かることになった。そして最後は、奥様が運転する車で、王寺の駅まで送っていただくことが通例になった。：：何時の頃からか、これに先生も同乗され、王寺の駅まで送って下さるようになった。実は、我々は、その深い意味に気づけなかった。：：おそらくその頃、すでに先生は余命が極めて短い臓臓がんに罹っているということを告知されていたのだと思う。

王寺の駅は跨線橋の上の改札口に上がるために、幅の広い階段がある。階段を半分くらい上がって振り向くと、ご夫妻は階段の下に立って見送っておられる。会釈をして少し上がってまた振り向くと、ご夫妻はまだ立っておられる。また会釈して階段を上る：：何度かそんなことがあって、我々は一度中段で会釈したら、あとは振り返らず改札口に突進することにした。

二〇一七年九月一日、我々は資料集のDVD版が上梓されたことをご報告するためにお宅に伺い、またいつもと同じようにご馳走にあずかり、王寺の駅まで送っていただいた。跨線橋の階段を上り、中段で会釈するいつものようにご夫妻は階段の下に立ってこちらを見ておられた。我々もいつものように、あとは振り返らず階段を駆け上がった。

浦西先生の姿を見たのは、それが最後であった。

注

- (1) 関西大学国文学会紀要『国文学』八一号（二〇〇〇年一月）、八二号（二〇〇一年三月）、八五号（二〇〇二年二月）、八六号（二〇〇三年二月）に掲載されている。なお、この貴司山治日記はその後、立命館大学貴司山治研究会（中川成美ゼミ）の方々の尽力によってその全部、約一万三千画像が画像データ化され、貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』（不二出版、二〇一一年一月二〇日）として刊行されている。

- (2) 『文学案内』は文学案内社より、一九三五年七月一日～一九三六年二月一日の間に刊行された。二〇〇五年六月一〇日、不二出版より復刻されている。

- (3) この全集は当初全一巻および別冊二巻が計画されたようだが、実際に刊行されたのはそのうち第一巻～第九巻である。

- (4) 引用本文および書誌の記載は、『著作集』第三巻を参照した。

(5) この作品は戦後、臼井吉見ほか編『土とふるさとの文学全集』
第二巻(家の光協会、一九七六年五月二〇日)にも収載された。